

◆この度、外山滋比古先生の追悼のご本が送られて来た。なつかしい思いに先生のおそばに居るような気がしてなりません。もう一周忌になったという日々は、またたく間に過ぎてしまった。まもなく先生の所で、在りし日のようにご一緒したいと思いつながら、生きた証として書き残してきた古い原稿や歌稿などを取り出して少しずつ終活しているが、中々はかどらない。あとは掃き捨てにしてもらうことにしよう。

市川茂子

◆満洲屋——三年前南陽市漆山の古い街道を車で通った時、右側の店の西壁に「満洲屋」という文字が見えた。一瞬で通り過ぎたものの、忘れていた暗い歴史がぬっと目の前にあらわれた思いで、後日確かめに行った。「満洲屋酒店」だったらしい文字は剥落が激しく、かろうじて輪郭線で読めた。現在店は閉じているようだったが、歳月を感じさせるものの正面は赤瓦の瀟洒な構えで、渡満する人を送る歓呼の声が聞こえてくるようだった。五族協和、王道楽土の言葉を背景に、満洲で敗戦を迎えたという人を周囲に幾人も数えることができる。敗戦と共に国は八十万人の居留民をその地で生きよと切り捨てたのだ。

梅津純子

◆今年も天候のせいであまり果物の出来がよくないと聞いていたが、七月の雨が梨にはよかったとこのことで、庄内の刈屋かりやに梨を求めて出かけて行った。口にしたところ、甘味、歯ざわりとも抜群で、そのみずみずしさは群を抜いている。さすが刈屋梨。鳥海山も微笑んでいるように見えた。「老嫗の梨売る背に出羽の富士」

神村ふじを

◆この夏、初めて植えたズッキーニの苗は、無謀な生長ぶりや大柄の花、次々出現する実など変化が目新しく、一躍庭の主人公に。今朝はどんな塩梅？と、恐る恐る窓から眺める夏の日々。結局、自らの重みに耐えきれず、志半ばに折れてしまいました。心奪われる半分、もつと目を向けるべき存在がいろいろあるでしょと突っ込んでみたり……逃避です、手っ取り早いものに。さらに、ますむらひろしの漫画に出会って四十年近く、山形美術館の展覧会に何気なく行ったところ思いがけず三時間くらい経っていました。今更ですが「重い」と「深刻」とは違うと感じています。

大橋千佳子

◆子の運転で出かけることが多い。沼津港にいこう、ということ、同乗することになった。魚市場が観光地になっていて、おいしい魚が食べられるという。沼津インターからの長い下り坂がよか

った。視界のひろさ。両翼は大小の山、愛鷹山、香貫山の名をしる。沼津港は狩野川の河口、駿河湾にのぞむ。魚市場は広く、にぎわっていた。若い人が多い。子と遅い昼の海鮮丼を食べながら、遅まきながらおもいついたのが千本松原だった。市場近くの牧水記念館で牧水がつかっていたという机にすわり、アンケートに記入するなどした。そこから千本松原にでる。晴れたそらから、対岸の伊豆半島の山々、海、愛鷹山肩の辺の黒い隆起、富士山をみることができた。流木のある海岸。土手近い松はかたぶきよじれていて、風をつよさを思わせた。国道一号線、新幹線と平行する長い、大きな帯の松の林である。その松原のなかの散策路中頃に、牧水の数多い歌碑のさいしょ(のもの)、大岩があった。

小野澤繁雄

◆ご時世は、コロナ禍戦争異常気象と落ち着かない。身边も介護補佐など心中騒然である。時折考え込んでしまうが、こんな時こそ心身ともに自己を保つのだと自己流リセットしている。最近手にした雑誌の「マインドフルネス」の紹介と実践法は有効だ。禅寺で、墨染めの衣を着て、正座してといかめしく考えていたが、日常のスキマ時間が活用できる瞑想初歩である。「待つ」ことが嫌いな私には申し分ない。基本は呼吸法らしい。普段気づいていない自分の呼吸に意識を集中させることから始めることにした。自分の心や体調に合わせるのがよいが、「1分間呼吸瞑想」が気に入った。→4カウントで息を吸う、7カウントで息を止める、8カウントで息を吐くの約20秒をくりかえす。

すゝ時間の有効活用SDGsだと思う。

河村郁子

◆こちらでは、そろそろコロナも落ち着いてきました。というか、気をつけながらコロナと共存して暮らしていくという感じでしょうか。今年の秋は、様々な文化イベントが目白押しです。早いもので、カレンダーもあと三枚を残す限り。年を重ねて加速していく時間の流れに、これからについて思いを致す今日この頃です。ほぼ二年にわたって「スイスからの便り」を書かせていただきましたが、今回は最後の寄稿となります。今までお読みいただきましてありがとうございます。スイスから、皆様の益々のご活躍をお祈りしております。それでは、またの機会までごきげんよう、さようなら。

ギンジツク恭子

◆長年白鷹町議会議員を務めた本木勝利さんは、村の人たちと働きに行った一九六六年初冬から翌春にかけての、川崎市宮前区の建設現場と飯場の暮らしをカメラに収めた。当時彼は弱冠二十二歳。自動車運転手の仕事の傍ら、写真を撮りためた。帰ってから「出稼ぎ」というスライド作品にして、置賜地区視聴覚作品コンクールに出品したという。そのことを彼がすっかり忘れていた二〇二一年、役場の倉庫で学芸員の石井紀子さんが発見した。彼女は、これは貴重な歴史資料になると確信し、DVD化しようと友人らと奮闘した。不明瞭な録音テープもデジタル技術を駆使し、

見事によみがえった。写真は素人とは思えぬ腕前だ。語りは韻文的で並々ならぬ才能を感じさせる。彼は二十代で詩集を自費出版している。後日私は知ったのだが、彼は高校時代は写真部だったという(なるほど)。DVDを町内の何か所かで上映するうち、農業ジャーナリストの大野和興さんの目にとまり、その後の白鷹の変貌を含めた映画を作ろうという話になった。記録映画作成委員会を立ち上げ、大野さんと本木さんが監督になり、制作を開始。一年かけて、この七月に完成した。タイトルは「出稼ぎの時代から」。初上映会には会場いっぱい約一四〇名が集ってくれた。アンケートには、「とても良かった」が圧倒的で、名前だけの副委員長の私もほっとしている。今後、県内外で多く上映されることを期待する。

新野祐子

